

一息入れましょう

ここ数年「氣の仲間達」と毎年神社巡りの旅行に行っています。今年のタイトルは「岩戸開きの旅」と命名して行きます。

その発端が島田先生の記された以下の内容なのです。

お楽しみください。

その 370

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 1

現代人の大方は昔ある地方で尊敬されていた人が死んだ後、その人の靈魂を祀って神社を建て、またはある時、ある部族に御利益を与えたと信じられる出来事の靈的な原因を神として祀ったものが、大きく国家的な信仰を集めて神社となったものであろう」ぐらい、に考えることであろう。

もちろんそういう神社も多数あるのであって。天智天皇を祀る近江神宮、南朝の忠臣楠氏を祀る湊川神社、幕末期の蒲生君平を祀る蒲生神社等その例である。しかし。神社すべてがそうなのではない、特に古事記・日本書紀の神代の

巻に出てくる神様となると人間生命の、そして人類の歴史の奥底のところで人間を生かし、歴史を想像している精神的な  
実在を表徴しているものなのである。 いわば人間の生命そのものである存在なのだ。

神様の戸籍をこのことから考えて行くことにしよう。筆者はよく神様は何ですか？と尋ねられることがある。そこで辞書を参考に見よう。「神—人間の宗教心の対象となる超人間的な威力を持つもの宗教によって異なる。例えば、キリスト教では宇宙を創造し、支配すると考える全知全能の唯一絶対の主宰者。（上帝・天帝）を言い、神道では皇祖神をはじめ各地神社の祭神を称した。」とある辞書のこの説明を読むと、筆者は直ちに仏教の正像末の予言のことを思い出す。

正像末三時とは正法・像法・末法の三つの時代のことをいうのである。正法時とはお釈迦様が死んだのちの五百年間のことで、教・行・証が整っている時代である。人間が仏となるための教え、仏に達するまでの修行、その修業を積み重ねれば仏様になる事が出来るという証明の三つが揃っているという時代である。

次の像法時代というのは、正法時に次ぐ千年間のことで、仏となるための教えと仏に達しようとして修行する人はあるが、  
仏になり得た人がいない時代である。教行の二つはあるが、証は無い時代である。

次の末法の世は万年と言われ、仏の教えが人々の関心から消えてしまい濁悪の世相が続く時代である。お釈迦さまがな  
くなって二千五百年余、今は末法の真只中ということになる。仏となるための教えがなくなってしまうと仏と人の繋がりが  
消えてしまって、唯仏という言葉だけが残る。そうなると、仏様とは人間界からかけ離れたもの、そして人間に対して超越し  
た力をもっているものと考えられるようになり、人間は唯々その前に頭を下げ、御利益を頂くようお願いすることだけの可  
能な存在となってしまう。この末法の世の人々の仏様に対する態度はそのまま先に書いた神様についての辞書の説明と  
一致しているではないか。

その 371 につづく

その 371

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 2

日本の神道の神々に対する日本人の考えの移り変わりにも正像末と同じことが言えるのである。今より二千年以上昔、日本には素晴らしい精神文明の花が開いていた。その文化の中心となっていたのがアイウエオ五十音の言霊の原理であった。正法の時代、仏教では仏に至る道（教行証）が備わっていた。同様に日本神道においては人間が人間であることのすべてが明らかにされていたのであった。

人間の心の一切は言霊の原理によって理解し、表現することができた。人間を人間として生かす一切の条件、これを神と言わないで、ほかに神はどこに居るんだろうか。古代の日本人は、神といえばそれがなんであるか。その内容を明らかに知っ

ていたのである。それなら神とは何なのか、神とは言霊である。人はそれによって考え、それによって表現し、それによって生きている。この時代、人は他人の言葉や世の中の出来事の表現に、対してそれがどんな意味を持つのかを、考え解釈する必要がなかった。言葉がそのまま物事の真実の姿を現していたからである。聖書ヨハネ伝に見るように「言は神なりき」であった。

この時代、人の神に対する態度は斎（いつく）ことであった。斎（いつく）の語源は五作（いつく）る、である。五とはアイウエオの五母音のこと。作るとは心の中にアイウエオと一つ一つ築き上げて自覚して行くことである。人間の心は五つの母音の五重（いえ）の構造の中に住んでいる。家の語源である。人の住処である五母音を自覚することによって、人間の精神のすべてを、言い換えると神を知るのである。これが斎（いつく）である。現代の宗教の難しい言葉では神人合一（神と人が一体になった状態）という。

その 372 につづく

その 372

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 3

今から二千年前神倭朝第 10 代崇神天皇の時、言霊の原理の精神文明創造のための運用が停止され、その原理は神として神社に祀られてしまった。神といわれるものの内容であり、人間が人間として生きる一切の条件である言霊の原理を理解して、それを世の中の文化創造のために利用することができる人がいなくなり、原理は信仰の対象となる神様としての神社の中に封じ込められてしまったのである。

そのとき以来、神は斎（いつく）、ものから拝むものになってしまった。拝むと愚かと同じ意味の言葉である。愚かな人間が超越した力を持つ神様を拝む時代となったのである。

先に仏法の正像末の三時代のことを書いたが、それに比べ神道は正法から末法へ一挙に転落したことになる。強いて神道の像法時代を求めるならば、神倭朝第一代神武天皇より約一千年間を言うことができようか。この時代には言霊の原理の政治その他の文化創造への適用は停止されたが、原理の理解者は相当数残っていた。神というものが何であるかの、内容の理解者全くはなくなっていない時代だったとすることができる。

言霊の原理が、日本の文化、社会から姿を消して二千年、現代は神道において、末法時代のどん詰まりとすることができる。神社の神主さんもそこに参拝する人も念頭にあるものはただ「御利益」という世のとなったのである。

その 373

につづく

その 373

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

## 神様の戸籍 4

前置きが長くなった。」というのも、神様の素性・戸籍調べのために戸籍台帳として、日本神道の基礎であり、同時に古代日本語の原点であるアイウエオ五十音言霊が必要であることを知っていただきたいためである。この戸籍台帳に照らし合わせることによって、神々の精神宇宙に占める位置、従って、人間の社会とどう関連していくかが手に取るように明らかになって行くであろう。

日本の神は八百万（やおよず）の神々といわれる。事それほどに数が多い。神社の数も無数である。さて、その多い神社の中のどれから戸籍調べ行ったよいかとなると、まず一番に考えるのが皇祖神と言われる天照大御神を祀る伊勢神宮であるが、このお宮については、昨年、平成元年にこの会報の特集で詳しくお伝えした。そこで、筆者が思い出すままアトランダムに神社と御祭神について感想を書き綴っていくことにする。当然、取り上げるべき神社を書き忘れて、内容に研究不足のこともあろうと思う。その点をご容赦願いたい。



## 雄山神社

この神社の名を聞いて、どの神社がすぐわかる方は、山登りに関心のある人である。立山連峰の中の標高三千五百米。雄山山頂にこの神社は立っている御祭神は古事記・日本書紀に出てくる伊耶那岐神である。なぜこの神社が第一番目に取り上げたかという、この御祭神が、日本の八百万の神々を創設した父の神だからである。立山とはもと父（ト）の山といった。トが後世タテに訛ったのである。万物の父であり、創造主神・創造主である神の住む山の意味であった。

記・紀にある伊耶那岐神は言霊学で言う言霊イ（宇宙生命意志）を表徴する神名であることは今まで幾度となく書いてきた。言霊五十音そのものを表す神である。いわば神様の戸籍台帳そのものである。古事記神代の巻きには伊耶那岐神が妻神である伊耶那美神と力を合わせて多数の御子神を産むことが記されている。大事忍男の神・石土毘古神・石巢比売神・大戸日別神・・・と御子神が出来る。

ご覧になるようにその神々の中に石とか日とか自然の中に存在するものがあるためか、一般には伊耶那岐という神が宇宙が出来始めるために自然のものを作り出して行く有様を記したのであると思う。しかし、事実はそう決してそうではない。昔の人は、そんな幼稚な精神の持ち主ではなかった。

その 374 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 5

その 374

宇宙生命の意志が頭脳中枢に働きかける。その刺激によって頭脳中枢を形成している先天の精神要素十六個の言霊が活動して、後天現象の単位となる三十二個の子音を生んでいく。古事記はこの純粋な精神の側から見た万物の創造を、伊耶那岐神の「子生み」として説明しているのだ。この精神構造の解明発見はちょうど現代科学が物質の原子核の内部の構造を明らかにしつつあるのに匹敵する人類文明の成果なのだ。伊耶那岐神言霊以下、先天十七個、後

天三十二個言霊の文字一合計五十の言霊で人間の心が構成されている。人間の心は、この五十個の言霊以外のものではなく、五十個が欠けることもない。そして我が子大日本の言葉は先天・後天の五十個の言霊の実際に即した組み合わせによって制定されたのである。このような組成による言葉は世界の中でも日本語より他に存在しない。

この雄山神社は夏の登山シーズンとなると神主さん、が毎日山に登り、参拝者に御神酒を振舞ってくれる。筆者がこの神社にお参りしたのは、もう 10 年ほど前のことである。8 月の中旬の良く晴れた日だった。前日標高二千五百米の室堂の山小屋に泊まり、翌朝早く起きて登った。途中の残雪を踏み岩場を過ぎ、雄山山頂に着いたのは朝九時を少し回った頃であった。参拝者が 15 人ほど集まったところで、神主さんがお祓いをし、御神酒を注いでくれた。岩登りの汗ばんだ肌に山の冷気と御神酒誠に爽快であった。その後神主さんが東の方を指して山下の雪渓の彼方に連なる後立山連峰、槍ヶ岳、穂高連峰の山々の名を教えてくれた。

本州の背骨にあたる峰峰を一望する景観は見事であった。雄山神社参拝を終え、山頂社務所脇の売店で土産に金色の小さい鈴を一個買い、筆者が立山連峰の縦走に移ったのは十時であった。その時の気分の清々しさ霊峰立山と呼ぶにふさわしいものであったことを記憶している。

なお雄山神社の摂社はトトの山の山麓立山町、富山電鉄線山峠寺（やまくらてら）駅より徒歩 300m のところにある。

その 375 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 6

その 375

白山比咩神社（「しろやま」はくさんひめ）。

この神社は、石川県石川郡鶴来町にある。金沢市野町より北陸鉄道の電車で三十分、加賀一ノ宮駅前である。創建は崇神天皇の時と伝えられる。摂社末社の数は全国に多数であるが、その社名は白山比咩神社ではなく、白山神社と呼ばれている。御祭神は伊耶那美の神であるが、神社の発行する案内書には「御祭神は白山比咩大神（菊理媛神）「きくりひめ」・伊耶那岐神・伊耶那美神」と書かれている。

この四神のうち、伊耶那岐の神については雄山神社の項で説明したが、残り三神である。白山比咩大神・菊理媛神・伊耶那美神はどんな関係にあるのか、については神道学者や霊能者の間で議論が分かれるところであり、まことに興味深いものがあるが、ここでは伊耶那美神についてのみお話しし、他の三神の関連については、のちに白山神社の項で詳しく説明しようと思う。

その神社の所在である石川県昔、加賀の国と言ったその語源は「カカの国」であり、お母さんの国の意である。伊耶那岐神は万物の親のうちの夫・父であり。伊耶那美神は親のうちの妻・母である。岐神は言霊イ、美神は言霊ヰである。今まで何度となく説明したように主体であり、吾である言霊母音と客体であり汝である半母音が同交感応して実相である子音を生むのだが、その時の母音と半母音の感応の契機となるものが万物の親である伊耶那岐・伊耶那美神である言霊イ・ヰである。

筆者がこの神社に参拝したのは、先に書いた立山雄山神社の翌日八月中旬の猛暑の時であった。立山を下山し、麓の雄山神社の摂社に参拝した後、電車を乗り継いで金沢市に着いたのは正午近くになっていた。あわよくばその日のうちに白山山頂まで登ろうと思っていた思惑が外れた。白山山頂までは登山口の別当出合から 5 時間かかるから、午後遅くから登山不案内の人には無理である。やむなく白山の途中にある白山比咩神社参拝のみに変更した。杉木立のウツソウとした境内はさすがに涼しかった。鶴来町のこの神社が下社で、奥社は白山。標高二千七百二米山頂にある。神社の案内板に白山の山自体が神の御神体だとあり、神社の一角に霊峰白山を望む遙拝所（ようはいじよ）が作られていた。

参拝が終わり、社務所で神社の案内書と共に小さい鈴を一個買った。この神社の鈴は銀色であった。雄山神社の金の鈴、白山比咩神社の金の鈴。鈴は人が口を開いた形を示している。鈴は神の口より出る言葉、言霊である。宇宙の意志である言霊イと其の鈴が鳴ると次々に全部で五十の鈴が鳴り出す。人間の精神より見る宇宙は、この五十の鈴・言

霊ですべてである。鳴り始めは言霊イ・杵である伊耶那岐・伊耶那美神であり、鳴り終わりは人間精神の理想の鏡を表す伊勢五十鈴の宮の天照大御神である。

岐・美二神の金と銀の鈴は紐で結んで、今でも筆者の机のそばに置いてある。時々手に取って振ってみる良い音である。まるで天地創造の響きのように。……言霊の勉強を始めてから最後に伊耶那岐・美の二神、言霊イと杵の内容その働きの様相をはっきりと自己の心中に把握することが出来た時、人間は初めて人間とは、ホモ・サピエンスとは何であり、何処から何処に人類の歴史を創造して行ったらよいかが明瞭に理解され、その実行が可能となるのである。

その 376 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 7

その 376

戸隠神社

戸隠神社は長野駅より北西十八キロ バスで約 1 時間のところにある。主祭神は手力男の命。「神社案内によると奥社の祭神は天手力男の命・九頭龍大神・中社祭神は天思兼命（あまのおもいかねのみこと）。宝光社祭神が天表春命（あめのうははるのみこと）日御子社祭神は天鈿女命（あめのうずめのみこと）とある。文中にて詳しく説明する」。

既に神倭朝八代孝元天皇のときの記録に出てくる古い神社である。後に役小角（えんのおずの）がこの神社に関係があったと伝えられている。手力男の命と言えば、ある年数以上の人なら誰でも知っている。

古事記神話に登場する神である。古事記「天の岩戸」の章を見よう。

こ

「ここに須佐之男命……天照大神の忌服屋（いみはたや）にましまして神御衣織（かむみそ）らしめたまふ時に、その服屋の頂（むね）を穿（うが）ちて、天の斑駒（ふちこま）を、逆剥ぎにに剥ぎて墮とし入るる時に、天の衣織女（みそおりめ）見驚きて梭（ひ）に陰上（ほと）を衝きて死にき、かれここに天照らす大神見畏みて、天の岩屋戸を開きさし隠（こも）りましき。ここに高天原皆暗く、……ここに万の神の声（おとない）はさ蠅なす満ち。萬の祓悉くに発りき……」とある。「天の岩戸」の章を現代語で大筋を述べてみると次のようになる。



「

天照大神が営む高天原の田んぼや服屋（はたや）に弟神の須佐之男命が乱暴を働いた。天照大神はその様を見るに耐えず、天の岩手の奥に隠れてしまった。そこで高天原は真っ黒となり、日本の国も真っ暗な暗黒の世となり、色々な神の声が入り乱れ、すべての禍事が起こった。困り果てた高天原の神々は、天の安の河原に集まってどう対処したらよいか、を相談した。その結果、高産巢日の神の子思兼の神に考えさせて、天の岩戸の前に種々の準備を整えた。天鈿女命（あめのうずめのみこと）が神がかりして岩戸の前で裸踊りをした。その格好が可笑しいと神々は皆笑い出した岩戸中の天照大御神は岩戸の外の世界が皆暗く、人々は悲しんでいるはずなのに、笑いさざめくとは如何なることかと岩戸を開け、外に身を乗り出した時に。岩戸の脇に隠れていた手力男の命が大神の手を取って引き出し奉った。天照大神の再びの出現で、高天原と日本の国は明るくなり、元の姿に戻った。」以上が戸隠神社の祭神手力男の命にまつわる古事記の神話である。

日

日本ばかりでなく、外国も含めて民族の神話というのは、昔のユートピア的願望の創造した文学作品に過ぎないと思える人が多いようである。しかし、今に伝わる古代の神話は、実は人間の生命の根本原理に基礎を置いた人間そのもの、またはその長い歴史を謎の形で表した物語なのである。古事記・日本書紀の神代の巻は、今まで度々述べてきたように、人間の精神の基本構造であることの言霊の原理がある一定の期間、民族の意識から消されてしまう間、神の物語という謎の形で後世に遺された民族の遺産なのである。神話が問いかける謎を正確に解くことによって、人間の真の姿とその歴史の真相が明らかになってくる。

手力男の命に関する古事記の神話どう解釈すべきなのか、人類が迎えようとしている新しい時代に、手力男の命と神話のなかで呼ばれるものは、どんな役割を担ったものなのか、以前から筆者自身の一見明らかに分かっているようでなぜか何処かぼんやりした問題であった。それが戸隠神社に参拝して一挙に解決したのだった。文字どうり参拝の御利益というべきであろう。

その 377 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 8

その 377

筆者が観光を兼ねて戸隠、木曾、御嶽両神社の参拝。思い立ち家を出立したのは昭和 61 年 8 月 25 日の早朝であった午前 10 時頃、特急あさまで着いた長野駅前が猛暑であった。午前十時少し過ぎ駅前発戸隠キャンプ場行きのバスに乗った。長野市内からバードラインに入り、走る。一時間戸隠神社奥社前に着く。さすがに戸隠高原は涼しかった。

鳥居をくぐると奥社参道がまっすぐ伸びている奥社まで穏やかな登りで徒歩 30 分（片道）の事、諦めて帰っていく人もいる。参道は広い土の道で、杉木立が気持ちよく続いている。しばらく道が急な登りとなると、もう奥社は近い。参道の長く立派なのに比べ、奥社本殿は、それほど、大きくはない。案内の立て札に本殿、祭神は天の手力男の神、別社祭神戸隠大神と九頭竜大神とある。参拝を終え、庭園を散策の後、帰途についた。社務所の脇から神社の背後に聳える戸隠山への登山道が上がっている。そこを過ぎて元の参道を高原の気持ちの良い日差しを楽しみながら下って行った。

天照大神が弟神須佐之男命の乱暴な振る舞いに会って、岩戸の中に隠れたとは神話の話である。この神話の内容を実際に歴史的事実として、どのようなことが起こったかを考えてみよう。今から三千年前、その時まで栄えていた日本を中心とした世界の精神文明の他に、物質科学文明の建築を促進する。ために政策の大転換が始まった。物質科学の急速な発展の精神基礎は、弱肉強食の生存競争の社会である。その社会を出現させるための一時的方便として、道徳平和の政治の鏡である五十音言霊の原理は世界人類の意識から隠すことが必要である。そのため、肇国されたのが神武天皇に始まる神倭朝であり、また第十代崇神天皇による八咫鏡と天皇との同床共殿を定めた制度の廃止であった。

言霊の原理は天照大神という信仰の対象として、伊勢神宮の奥深く祀られてしまった。生きた政治の原理法則が、実

際の政治の運用を停止され、神社の奥に隠されてしまったのである。この事件こそ神話の天照大神の岩戸隠れとして示されないよう歴史的事実なのである。

精神的真理を方便として隠す作業にも工夫・苦心を要したことであろう。隠す作業には方便の必要がなくなって、真理が再びこの世の中に現われるための準備も合わせて考えなければならない。戸隠神社の存在がすべて、その真理の甦りの準備のために作られたといえる戸隠。隠す方の人々の第一人者は神倭朝第一代神武天皇である。物質文明促進のための政策を決定した。第二番目に第十代崇神天皇があげられよう。言霊原理を伊勢神宮に神として祀り、真理を隠す施策の実行者であった。

その 378 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 9

その 378

他方再び現れるための準備の諸政策が講ぜられた。その内の一つとして戸隠神社の創設があったこの神社には関連する記録が 崇神天皇の二代前、孝元天皇の時に既にあることが、それを物語っている。岩戸に隠れた神が再び岩戸の外に現われるときにも、人の努力・工夫が必要であろう。真理の甦りの任にあたる人の出現を期待して手力男神と称するのであろうか。

岩

戸とは五十葉の呪示である。五十音言霊の前に立てられた戸である。時が来て人間の潜在意識の底に隠された五十音言霊の原理を、再び人間の顕在意識にまで浮かび上がらせ、真理を生きたものとする作業をする人すべてを手力男神と称するのであろうか。

神話の手力男の神をそう考えるならば、本殿脇の別社に祀られる戸隠大神と九頭竜大神という神名の意味もおのずと明らかとなる。神話のなかに出てくる竜または蛇は古代文字か主義などの考え方のパターンを表している。九頭竜とは九つの頭を持った竜の意味。物事の現象を九段階の変化として捉える判断力のことである。古神道では九拳剣と呼ぶ。天照大神の言霊原理によって物事を見る十拳剣に対して、概念によってみる月読命の判断力である。

実相を完全に把握する十段階の判断に、対して実相の概念的説明に始終して物事をボンヤリとしか見得ない判断力である。その判断では十段階の内の総結論である第十番目が欠如せざるを得ない。言霊の原理が隠され、何時の日か手力男の神による真理開頭が待たれる暗黒の時代には、月読みの系統に属する九拳剣を持つ判断力が言霊原理の代を行を務め、時が来て真理開頭される時、その手力男の神の活動の基礎となる知識として（東洋哲学）の働きが九頭竜大神というわけである。

もう一つの祭神・戸隠大神とは、その暗黒の期間、戸の中に隠れ、時が来て手力男の神が手を取ってお出しする隠れた姿の天照大神のことである。別社の二神とは天照大神と月読み命のことを指しているということができよう。

その 379 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 10

その 379

色々な思いを巡らしながら、もっと上がってきた参道から自然観察路になっている遊歩道にはいった。徒歩二十分程で中社に通じているという。杉の木立から 雑木林の中の道に変わる。夏の木々が秋を迎えようとしている風情が、空気はひんやりさせている。遊歩道の左側はなだらかな丘がつづき、かやとの中道が飯縄山に向かって上がっているのが、遠くまで見えた。人気のない静かな高原の道を散策すること三十分、中社に着く。



中社は古いお寺の本堂のような質素な大きい社であった。参拝を終えて神社の側に廻るとふと古い立て札が目にとまった。中社に祀られている神名が書いてある。立て札の板の字の墨も長い間風雨にさらされて黒ずみ薄くなっているが、それでも明瞭に読み取れた天の八意思兼神とある私の目が思わずその立て札に釘付けになった。

記紀の天照大神の岩戸隠れの神話にある手力男の命の役割についてボンヤリ抱いていた疑問が一気に氷結したのである。神社案内所に戸隠の中社の祭神が天の思兼命と書いてあるのは、以前から承知していた。思兼命も手力男の命も「岩戸」も神話に出てくる共に天照大神を岩戸からお出するために尽力した神であろう。唯それだけの関係で思兼の神を中社に祀ってあるのか、と思い、また淡い疑いを思っていた。別社・摂社ならともかく、奥社と中社との関係は何かもっと深い霊的な関係があるはずではないか。中社の神名がただ天思兼神ではなく天八意思兼の神の（あめのやごころおもいかねのかみ）とあるが、この疑問を一気に解決したのである。

天の八意思兼の神の八意（やごころ）に、心ではなく意の字を当てたのは明らかに根本意志の八律の展開である八父韻を表示している。宇宙生命意志である言霊イはチイキシリヒニの八つの父韻に展開して四つの母音をウオアエに働きかけて三十二個の現象子音を生む。頭に八意と八つの父韻が冠せられている以上、思兼の命の思兼とは単なる「思慮深い」という意味ではなく、思神音（おもいかね）の意味にとるのが順当である。思神音は神音を思うの意。神音は、この場合、実質の単位として三十二個の子音のことである。

その 380 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 11

その 380

天照大神の岩戸隠れに表徴される五十音言霊学が隠されて以来、九頭竜大神である東洋哲学や古くからの宗教書によって五つの母音に対して比較的詳しく説明されてきた。中国の五行説。インドの五大説がそれである。しかし、八つの父韻と三十二個の子音については、その存在のおぼろげな示唆の他は説明がなかった。八意である八父韻の存在から

現象の究極の要素である三十二個の子音の自覚が完成することこそ長い間、岩戸に隠れてた、天照大神がその岩戸から現れ出ること、すなわちアイウエオ五十音言霊の原理の自覚の完成の時である。

二千年の間、人類の潜在意識の奥底に眠っていた言霊の原理は今より百年前、初めて明治天皇御夫妻がその存在に気付かれて以来、幾多の先輩諸氏の研究の努力の結果、徐々にその全貌を現し始めた。古事記で言えば、岩戸に隠れた天照大神が岩戸の外の八百万の神々の笑いどよめきと怪しく思って、岩戸を細もの開いて少し身を乗り出された、というところにあたる。五母音・八父韻・三十二子員の言霊学の法則が徐々に整備されてきたのである。理論的な閑静である。

しかし、理論的完成が天照大神の出現を意味しない。理論は言霊才の次元である。天照大神とは言霊原理による理想の道德、政治の実行のための智恵の神であり、言霊工の次元である。その出現のために理論の理解から理論自覚とその運用の能力の段階に入るために、さらに一段階の進歩飛躍を必要とする。原理の自覚とその運用のためには、八父韻の自覚による三十二音の見識が必要不可欠なものなのだ。奥社に祀られる手力男の神の実際の役割は如何に。それは中社祭神の神名八意思兼神で示される如く八父韻の自覚による三十二の子音の見識の完成であるということが  
できる。

その 381 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 12

その 381

八つの父韻の動きを明らかに自覚することによって（八意）三十二の子音の見識を進めていくこと（思い神音）こそ、  
言霊学の総結論である天照大神を岩戸よりお出しする決定条件決定的条件なのである。

筆者言霊学の勉強を始めた頃、手力男の神とは天照大神である言霊原理を再びこの世に蘇ら仕事に従事する人々の役割に対する呪示だ、とっていた。それも全く誤りだとは言えない。しかし天岩戸の前に集う神神々は手力男の命の他大勢いる。思兼の神、天津麻羅、伊斯許理度女（いしこりどめ）の命、玉の祖（おや）の神、天の児屋の命、布斗玉の命、天の宇受売の命等である。そして最後に締めくくりが手力男の神なのだ。

だから手力男の神とは、正確には八つの父韻を自覚して三十二子音の開眼を可能にする言霊学の最終段階の研究者の役割に与えられた神名なのだ。ということが出来る。さらに言えば、天照大神の手を取って言わずから引き出し申し上げたことで「手力」の名がついた。と同時に手力は田の力に通じる。言霊学の理論的な把握にのみでは言霊工の実行の智恵を発揮することができない。原理を自己の魂の中に実現・自覚することによって初めて原理の政治への運用が可能となる。田力男とは言霊原理の力を発揮する人の意味になるであろう。

手力男の神の現代歴史の上での役割が以上のように明らかになると、この神と共に岩戸の前に集まった神々の名前の現実の意味も自ずから解明されてくる。その中で、天の宇受売（鈿女）の命の神名は歴史的に最も興味深いものなので付け加えておこう。

天照大神の八咫鏡の基礎となる言霊工を中心に動いた五十音図を天津太祝詞音図と呼ぶ。その音図のウの段のうち最後のウを除いた九の配列をウ・ツクムフルヌユスをウよりスに至るのでウスで天の宇受売の神という。その父韻の配列は、言霊工の道德政治の精神が物質科学による産業経済をコントロールする方法である。

もちろん天照大神の隠れていたここ三千年の歴史世界は産業経済の独走する須佐男命の時代であった。その音図は天

津金木音図と呼ばれ、ウクスツヌフムユルウの配列である。天照大神が再び人間社会の各部門をコントロールする時、それぞれの部門の精神を生かしながら、しかも新しい道德社会の一員として受け入れていくのが、天照大神の仕事である。

例えば、産業経済のウクスツヌフムユルウの競争原理はそのまま生かして、なおかつ他の社会部門との協調をしっかりと保つようコントロールする方法が、ウツクムフルヌユスの天の宇受売の命の精神というわけである。

その 382 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

神様の戸籍 13

その 382

共産主義は理論として、各人平等・共産という立場から人間の欲望本能を仕事のノルマと既定の賃金とを持って押さえこもうとする。資本主義は競争原理によって産業の進展を煽る。敗者は惨めである。人間の精神の構造から考えて、双方とも無理なやり方である。

人間の欲望に基づく産業・研究の競争心理を生かしながら、しかも団体・地域・世界全体を協調精神でまとめる方法は、唯一つ、人間の本有の性能のひとつである言霊工のタカマハラナヤサの心構えである。この心構えを仏教では仏陀の攝取不捨という。人間には五つの性能が与えられている。欲望(言霊ウ)、経験知(言霊オ)、感情(言霊ア)、実践智(言霊工)、生命意志(言霊イ)である。この五つの性能が全部強調して実践智(工)を中心として社会創造に励む時、人間社会は精神的ストレスの禍が少ない。

古事記は天照大神(言霊工)を出現させるための岩戸前の神々の準備によって、ストレスのない理想社会の創造を巧みに表現している。岩戸前の神事は伊斯許理度女の命(言霊イ段)天の児屋の命(ア段)、玉の祖の命(オ段)並びに天の宇受売命(ウ段)の母音四音の四段階の理念を準備して集会を開き、その四つの性能の考え方を天照大神(言



靈工) に見てもらふことによって、その中心となる知恵の御本尊である天照大神にお出ましを願うという段取りであり、神庭会議の計画であったのである。そして最後の極め手が八父韻による実相子音の自覚完成者である手力男の命というわけである。四 母音に手力男の命の八父韻の自覚が加わるとき、初めて天照大神という五十音言霊の実行の鏡が完成する極手となる。

中社参拝を終えて、下がってくると道には土産物店や宿坊が並んでいる時刻お昼をだいぶ回っていた。腹が空いた。家内と昼飯どこにしようかと物色して、新築して間もないように見えた「極意」なる屋号の宿坊に入り、名物の戸隠そばを注文した。名物に美味しいものなし、というが、このそばは絶品だった。

そ

ここに給仕に出た若い娘さんの物腰・言葉遣いの上品だったこと、戸隠の話になると家内との会話に、必ず宿坊の「極意」

の思い出となる。このような体験も旅の醍醐味の一つであろう。下社にあたる戸隠宝光社は、中世の神仏混淆（しんぶつこんこう）の時の産物との話、時間の都合もあり、宝光社参拝省略して戸隠高原を後にしたのは午後 2 時半を少し過ぎた頃であった。途中長野善光寺により市内駅近くまで徒歩で観光し駅前のホテルに泊まった。明日は木曾御岳の登山である。天気はどうであろうか。

その 383 につづく